
一枚奇譚

祿 左右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一枚奇譚

【Nコード】

N23030

【作者名】

袴 左右

【あらすじ】

A4用紙一枚に収まる奇譚達。短すぎる世にも奇妙な風味だと思っただけならば。感想お待ちしております。深読みとかほかの解釈とか、いろいろ読み方のありそうな話を書ければと思っています。

呪卦（前書き）

なぜ、人は怖いと思うのか。なぜ、怖いのに近づくのか。って話。

呪卦

お前は理解できないのかもしれないけどさ。

オレは、その、怖いものみたさ、って理解できなくもないな。

怖くないわけじゃなくな？やっぱり怖くてもさ、見たくなるんだよ。

いや、むしろ怖いからこそ、かな。知りたくなるのは。

怖いと、なおさら人間って興味が出てくるもんなんだよ。きつと。

怖いものが怖くなくなる一番の方法は、その正体を知ることだから、さ？

あー、もし幽霊とか見ちゃっても、それが単なる影だとか、トリックだとか、友達のいたずらだったとか、それを知ってしまえばもうなにも怖がることはないだろ。

だから、ある意味、そういうのって人間の本能なんじゃないのかな。

怖いものを克服するための、人間の本能……っーか、さ。怖い物好きは。

え？ いや、べつにさ。納得しろ、って言うわけでもないけど。

んー……とりあえず、付き合ってみるぐらいいいんじゃない。肝試しぐらいさ。

まあ、話はそれるけどさ。オレ、彼女出来たじゃん。

いや、自慢じゃないって。

……彼女？ いや、可愛いけど、さ。

あ、ノロケでもなくて。

え？ ……なにが、可愛いけど、なのかって？

案外、お前、話ちゃんと聴いてるよな。

いや、褒めてるんだって。そういうの気付かないヤツ、結構いるし。

うん、確かに可愛いんだ。けど、彼女がさ。

そういうの見える人らしいんだよ。

……引いたってわけじゃなくてさ。そういうの知ってから、付き合ったし。

正直、オレ、彼女のこと怖いんだよ、そういうところだけじゃなくって。

アイツ、オレのこと好きだっけって言うんだ。

いや、彼女がじゃなくて、いや、彼女もそうなんだけど！

……幽霊に好かれてるんだってさ。

ずっとオレの背中にべったりとくっついてるんだって。髪の毛の長い女がさ。

足にも、なんか、髪の毛が巻きついてるらしくて。

全身、その女の髪の毛だらけ、頭から足先まで絡み付いてる……みたいな。

……ん、ずっと居るらしい。

オレの背中に。

ああ、今も。

信じてなくても怖いだろ。気味悪いよな？

でも、彼女、だから、オレのこと見てたいんだって。

どうなるか、わかんないから。怖いから。

そんなとりに憑かれ方した人間なんて見たことないから、オレが最期どんなふうになるのか、その結末が知りたいんだってさ。

実際、幽霊よりも、そういう人間の方が怖くねえか？

え？ ……ああ、そうだよ。やっぱり、よく話聴いてるよな、お

前。

そう言われたから、付き合いたいって思ったんだよ、オレ。

呪卦（後書き）

怖いのは人間じゃなくて、おまえらだ。って話？

カイシヨウ（前書き）

甲斐性ってなんなんですかね？

カイシヨウ

やつすいアパートにだれる野郎ふたり。

「暑いねえ」

相方のハルキが言った。うるさい。なおさら、暑くなる。

外は真夏の正午、太陽光線直下。

ふと見ると、日傘を差して、歩いているヤツがいた。

窓からアスファルトを見下ろし、うちわをあおぎながら思う。

今の時間帯に外歩くやつ、馬鹿じゃね？

「ねえ、ユウジ」

「あ？」

「なんか涼しい話してよ」

相方の、突然のふり。なんだその、無茶ぶり。

そんなトーク持ってたなら、今から合コン行って活躍させるわ。

「俺をどっかの名司会者だとも思ってたんのかっつーの」

「だよねえ、そんな甲斐性あつたら今頃彼女と外で歩いてるよ」

そうか、俺が外に行かないのは彼女いないからか。って、ふざけんな。

「そついう、おまえはなんなんだよ」

「いや、オレ、彼女いるし」

なら、なんでこんなところでだれてんだよ。

「女と一緒にだと疲れるじゃん」

「……おいおい」

「でも、オレは涼しい話出来るよ」

甲斐性あるから、とハルキはそう言った。

それと女いること、なんの関係があるんですか。

「今、外に日傘を差してる女の子いない？」

確かになんか、さっきからずっと歩いているな、ぐるぐるよ。

ハルキはニヤッと、白い歯を見せて言った。

「今月からずっと、なんだけど」

「そうなのか、気づかなかった」

「ああ、で。それ、オレの前の彼女」

……うええ、なんだそれ。

「そりゃ、涼しくなるな」

「でも、先週、その娘。死んだはずなんだよね。オレ、フッタラさ
自殺したらしいよ、とそう言った。

そりゃもう、涼しい声で言った。

いや、むしろ涼しい通り越して寒いつつの。

「まあ、冗談だけどね」

……腹立つな、こいつ。

でも、同時に俺は納得して頷く。

「そりゃ、俺にそういうトークは無理だよな」

冗談か、本気かは知らんが、そんな怪^{もの}を背負^しえる甲斐性は冗談で
も持っていない。

カイシヨウ（後書き）

たぶん、モテる人ってなんだかんだ背負ってる気はします。男女問わず。

死んでくれる？(前書き)

人からこう言われるってのは光栄なんですかね？

死んでくれる？

「死んでくれる？」

「無理」

俺はそう答えた。

いや、だって。

なんで俺が死ななきゃいけないんだ？

その女は年上のくせに、道ばたで歩いている俺に突然、そんなわけのわからんことを言ったのだった。キラリと光る、包丁を突きつけて。

それはそれは歌うように言いやがった。

「だって、寂しいじゃない」

それは、一緒に死ねってことですか。

「あら、違うわよ」

だって、一人じゃ足りないもの。

さわやかに言いやがった。いやいや、意味わかんねえよ。

「みんな、一人だと寂しいじゃない」

みんなかどうかは知らんよ。そんなこと聞いて回ったことは今のところないしな。

「でもね、私はいや。一人なんて、いや」

「……人の話、聞いちゃいねえ」

「でも、人間って一人で死んじやうでしょ」

「あー、まあ、普通は……そうだろうな」

「みんなで一緒に死んだ方が、にぎやかでいいじゃない。元気なうちには、そんなこと出来ないでしょ。だから、ね？ みんなで死んでくれる？」

……思ったより、きつつい理屈だった。まだ、心中相手探すならわかるんだが、どうやら見かけた人間を殺すだけ殺した挙げ句、自殺する気らしかった。

無理心中っていうか、自爆テロだな。つか、自殺テロだな。

「それも、違うの」

「なにが」

「私が死ぬまで、道連れを作るつもりなの。……旅の道連れ」

要するに自分から死ぬ気はないそうだった。

もう、常人の理屈からかなり離れたところにいるらしい。推定、2

万キロだろうか。大気圏外だ。地球外だ。

「だから、ね。死んでくれる？」

ね、と言われても。

「んー、その話の前にとりあえずうちに帰れや」

俺はその手を引っ張る。

「……姉ちゃん」

わりと、いつものことだけどさ。いい子にしてくれよ、そのうち付き合っつてやるからよ。

「……わかった」

嬉しそうに、へらへらと、姉は、女は笑うのだった。

私、一人じゃないもんね？ と。

俺はいつか、別の誰かがこの手を引っ張る日が来るのか。少し、複雑な気分で考えていた。

死んでくれる？（後書き）

別の誰かが手を引っ張る日、
……そんな奴いるか？って話？

夏の窓（前書き）

夏場に窓を開けていると……。何にも起こらない。

夏の窓

俺の部屋の窓は開いている。
寝ている間も、起きている間も。

もちろん、夜も。

それは夏だけのこと。

暑さに弱い俺は、窓を開ける。

いや、閉鎖された空間、淀んだ空気が駄目なのかもしれない。

それは、単純に、俺の部屋が散らかっているせいかもしれない。

でも、なんだろうか。

こうして、夜に一人で過ごしているとき。

いつものように窓を開けていると、ほら、聞こえてくる。

電車の音や、鳥の鳴き声、犬の遠吠え。

でも、それだけじゃない。

誰かの笑い声。

狂ったような、笑い声。

なにがそんなにもしろいのか。

誰かの話し声。

声にならぬ、話し声。

いったいどこの言葉なのか。

誰かの泣く声。

儂く寂し、泣く声。

どんなに悲しいというのか。

誰かの叫び声。

遠く響く、叫び声。

まったくなにかあったのか。

聞こえてくる。

毎日のように、聞こえてくる。

なにがあるのか。

なにが起きているのか。

俺の知らないところで起きている、物語。

自分は決して、人生の主人公でも、なにかの物語の登場人物でもないような。

そんな仲間はずれにされてしまった気分と。

少々、歪んだ世界が見えてくるような気分を味わう。

俺は窓を開けたまま、眠る。

その声達を聴きながら。

たまに窓を叩くような音がするけども。

俺は気付かない、フリをする。

それは、夏だけのことだけ。

ほら、試しに覗いてみるといい。

ほんのささやかな涼しさと、少しだけ狂った世界へと。

いつでも、夏の窓は開いている。

夏の窓（後書き）

自分の知らないところで、すごいことが起きているのかも。ってた
まに思う。

そうだといいな、とも思うし、そうだと寂しいな、とも思う。

望戻（前書き）

結局、何もしてないのと変わらない。する前に戻ってる。

望戻

目の前にいるのは人間ではない。

亡霊だ。

生き生きと……楽しそうに話す、死人。

そいつは、ずっと繰り返し同じことを、そう、笑顔で話し続ける。本来ならば既に死んでいて、ここにはいないはずなのに。

まったくもって、本人は気付かないまま、俺に話しかけてきている。

どう返せばいいものか。

なにを話せばいいものか。

俺には返せる言葉は見つからず、ただ黙って聞いているのが精一杯だ。

しかし、こうも思う。

俺が思うに……いや、もしかしたら、だ。

別に確信があるわけではない。

そう、もしかしたら。

こいつは本当は気付いているのかもしれない。

自分が死んでいることを。

ただ自分からは言わないだけで。

俺がそれを指摘するのを待っている。

そして、次の瞬間にでも。

「お前は死んでいるんだよ」

そう言われるのを待っている。

だが、俺は決してそのことを言ったりはしない。

おそらく、それを指摘した時こそ、取り返しがつかないことになる。

……そう思ってしまったからだ。

指摘したことで彼は確信を得るだろう。

にやり、と笑ってこう言うに違いない。

「ああ、お前が知っていたのか」

その時、なにが起きるか、俺には想像のつかないことだ。

そして、恐らくは想像しても無駄なことだろう。

少なくとも、俺は殺される。

間違いなく無事ではすまない。

なぜなら……。

ああ、なぜなら。

……そう、なぜなら俺がこいつを殺したんだから。

やっぱり、いや、きつとこいつは気付いていないのだ。

背後から、バットでその頭を、後頭部をかち割ってやったことなど。

それをしたのがいったい誰なのかなど。そう知るわけもない。

……後ろなど、背中に目でもついてもない限り、見えはしないのだから。

それでも俺は、なにも話すことが出来ず。

結局、こいつが生きていた頃と同じように。

その話を聞いてやるのだった。

望戻（後書き）

いいじゃん、仲良さげで。って話？

隠れん坊(前書き)

記憶するのはよくお隠れになります。

隠れん坊

かくれんぼ。

よくあるのは、上手く隠れすぎて、誰も見つけれなくなったり。寂しくなって、自分から出てきたり。

案外、そう言うのは忘れていているけれど、思い出深いこと。楽しい思い出。

よく、わたしが隠れたのは。

公園のプレハブ小屋の横にある、土管の中だった。

ここに隠れると、誰にも見つからない。

だから、わたしが見つかるのはいつも一番さいご。

自分から出て行って、見つかる場所に移動して、それから見つかる。

みんなには、こっそり歩き回ってたんだよ。とか、説明してたっけ。

でも、けっこう変な場所です。

なんどか、わたしが隠れていたら不思議なことがあったんだよね。わたしが隠れていると。

なぜか、知らないオジサンやオバサンがわたしの名前を呼んで探していたり。

何も言わずに、知らないこどもが覗き込んできたり。

ずっと、誰かが目の前に立っているような気配がしたり。

あと、そう、誰かが歩きまわるような音だけが延々としたり……。今から、考えると、不気味にも思うけど。不思議と怖くはなかった。

んー、なんで見つからなかったんだろう。

土管の中だなんて、ありきたりな隠れ方だと思うけど。

この間ね、同窓会の時に、公園でかくれんぼしたよね。と盛り上がってた。

いつも見つかんかったよね、とか言われたから。
ふと、言ってみたの。

「わたし、プレハブ小屋の横の土管に隠れてたんだよ」って。
そしたら、みんな、「えっ？」って目を丸くして。

「そんな場所なかったよ？」

……やっぱり、不思議だよねえ。

んー。

そういえば、わたしさ。

一回だけ、オニやったことあるんだけど。

そのときに、だれか他にも隠れてるんじゃないかなって、探した
ことあるんだ。

その土管。

だれか居たかって？

いたよ。

うん、一緒に遊んでた子だったよ。知ってる子だった。

でも、忘れちゃった。顔もわかんない。

……誰だったかな。同窓会の際にもいなかったみたいだし。

んー、ところさ。さつきから疑問なんだけど。

さつきから話してる、きみ。だれ、かな？

隠れん坊（後書き）

思い出せないってだけで、不思議な話になる不思議？

風流な男（前書き）

本人は幸せそうな話です。

風流な男

ぼくは食われるんだろうか。

少なくとも、本人たちはその気のようにだ。

道に迷って、偶然に招かれた家。

そこには美しい少女と、その父親が居た。

二人とも、ぼくの好みだったし、なによりも。

趣味のいい家だった。

だから、ついつい、ぼくはためらいもなく、その誘いを受け入れたわけで。

喜んで、受けてしまったわけで。

中に入り、ぜひ、と用意されたお菓子に手をつけていると、声が

聞こえてきた。

「ねえ、本当になの？お父さん。本当にいいの？」

「ああ、そうだよ」

なにをそんなにはしゃいでいるんだろう、とそう思っていたら。

次の一言で凍り付いた。

「あれが、今日の夕食の主演だ」

夕食の主演。

そうか、主演か。

客人、じゃないよな。

主演、か。脇役ならまだしも、主演になるのは初めての経験だ。

うん、初体験。

かなり、喜ばれてるらしいかった。特に少女は育ち盛り。

女の子といえど、嬉しいんだろう。

肉が出る食事は……滅多に食べねえよな、そりゃ。

ふと、そういえば、今日は満月だったな、そう思い出した。

そうなのだ、ぼくは月を愛でる、風流な男だった。

……風流な男だったんだが、今日までか。

菓자에薬を混ぜてある様子はなかったもので、たぶん、紅茶の方だろつ。

紅茶の味は苦手なので手を付けなかったんだが、これはどうしたものか。

どうやら、母親はいない家らしい。

ふむ。

ふと、考えていると、娘さんがやってきた。

とても可愛らしい笑顔で。

「お父さん……は？」

「今日の夕食の支度だよ」

「そっか」

嬉しそうだったし、可愛かった。

あー、どうしよう。ぼくは彼女に話しかける。

どうせ、最期だし。思っていたことを言ってみよう。

「ぼく、ここの家好きだったよ。貴方達も。出来れば、友達になりたかった」

心の底からの本心を。

驚いた顔の彼女を見て、ぼくは満足して紅茶を飲んだ。

すぐに目の前は暗くなり、やっぱり最期は彼女の喜ぶ顔が見たかったな、とそう思った。

風流な男（後書き）

実はロリコンの話、っていうか、人も物も人外も見境のない変態の話？

この話に関しては実はロングバージョンもあったりする。

庭の桜（前書き）

なんかいろいろある話。

庭の桜

「興味ないんですよ」

そう、奴は言った。

「それがいったい何であったとしても」

綺麗だ、ということには変わりありませんから。

理解できない。

理解できないし、したくない。

……そんなものは、したくない。

だが、俺は気付いているのだ、嫌悪感だけでなく。

確かに、思っていた。

理解したくない、と言うことは。

つまるところ、同じように感じていたと言うことだった。

それでも、俺は理解できない。

アレ、を綺麗だとなぜ、言えるのか。

ためらわずに屈託もなく、純粹なまでに、どうしても言い切れるのか。

あれは結局のところ。

奴の家の庭には……桜の木があった。

咲いた姿は今まで一度も見ることがなく、それを知ったのは偶然だった。

とても、鮮やかな桃色の桜。

その桜は決まった日の夜にしか咲かないのだ、と。

俺達はその時、知ったのだった。

確かに、桜は美しかった。

だけど、それよりも驚くべきは、その下に佇む、切なそうな影と。

桜の花びらと共に舞う、いくつかの明かりのようなもの。

その幻想的な魅惑の情景を見て。

なによりも綺麗だと、奴は言った。

そつだ、影は女のように見えたのだった。

誰かを待つかのように、桜を、夜空を見上げていた。

愛しい人を待つように。

春になると、現れる。

俺は確かにその横顔を、綺麗だと思ったのだ。儂げな、切なげな、横顔を。

例え、その愛しい人に殺されて、そこに埋められたのだとしても。

奴は言ったのだ、アレは祖父の愛人だったのだ、と。

祖父の妻である女の、……実の弟だったのだと。

そこになにがあったのかは知らないが。

奴は、それを愛おしげに、綺麗だ、と言ったのだった。

理解したくなかったが、そう躊躇わずに言った奴のことを。

俺は綺麗だ、と思っていたんだ。

庭の桜（後書き）

幽霊って見たらたぶん、怖いくらいにきれいなんじゃないかと。

それを見て、きれいって躊躇うことなく言える人も、怖いくらいもきれいなんじゃないかと？

天使なんて（前書き）

もし、天使みたいな人が本当に身近にいたら。

天使なんて

天使なんて、信じていない。

悪魔なんて、きつといない。

もし、悪魔がいるとすれば。

ああ、こう解釈すればありえるだろう。

鏡を見たときと、あと家の外に出てみればいくらでもあえるものだ、と。

そう考えれば、家の中にも、外にもいる。自分の中にも、外にもいる。

もし、地獄があるとすれば。

テレビを見たときにくらでも目に付くし。それに、友達に無視されるようになった、あの同級生にとってはここが地獄なんだろう、とそう思う。

なるほど、この世に地獄も悪魔もいれば、神様もいるのかもしれない。

それでも、ぼくは天使なんて、信じていない。

つい、このあいだ。ぼくはある女の子に出会った。

もし、天使を信じている人がいるとすれば、きつと彼女をこう表現する。

「ああ、『天使』のような人だ」と。

この国で、「天使がいる」なんて変だし、とても奇妙なことだけだ。

きつと、そう表現するに違いないのだ。

あの娘はとても優しく振舞う。

誰が困っていても、初めて会った人でも、必要なら声をかけるだろう。

誰が助けを求めても、無視されている同級生でも、必要なら手を差し伸べるだろう。

それとなく、周りの人間に気を遣い。

みんな遊びに行つたとき、退屈そうな人がいれば声をかけ。元気がない人がいれば、見守り。

それでも、楽しそうに周囲に溶け込んでいる。

演技ではない。無理をしているのでもない。

いつだって、周りを気にしているのに、それが自然体なのだ。

気を遣っているのに、気持ちを送り減らすことがない。

それに、あの娘を気に入らない、と言う人はいても、嫌いだという人はいない。

嫌いになりたくても、嫌いになれないのだろう。

不幸なことに、無理やりでも嫌いになれないのだろう。

なかには、完璧な人間だと、まるであの娘が超人のように言う人もいる。

でも、ぼくはこう思うのだ。

彼女は誰にでも優しい。

誰にでも、平等に接する。

……だから、みんな彼女にとっては同じ程度の存在なんだろうと。

彼女にとって、きっとぼくらは特別でないのだろう。対等ですらないんだろう。

憎むほどのものでもなく、嫌うほどのものでもない。だから、とりあえずは優しく出来る。

かといって好きでもないから、同じ人とずっと一緒にいることもない、その程度の存在。

ぼくは天使なんて信じていない。

けど、いないとは思っていない。

信じるに値しないだろう。他の人間の苦しみを理解出来ないヤツなんて。

天使なんて（後書き）

嫌いな人がいないのは、相手を人間とすら思わないからだろうって
言う主人公？

好きな人がいるってのは、ひいきするってことだとは思いつ。そんな
相対的な話。

……わりとかなり、駄作。

「この世界がひっくり返る前の話」前書き

哲学的な彼女を書くこととして……な話。

「この世界がひっくり返る前の話」

「例えば仮に明日、私が死ぬとしてそれで私の価値が変わるのかな？」

ぼくはさあ、と首を傾げて見せた。

彼女は昨日やっていたテレビを見たらしい、題材は余命半年の…
…まあ、そこは重要じゃないか、とにかく人の寿命に関して思うことがあつたらしい。

彼女はぼくの返答を気にした様子もない、たいして答えなど期待していなかったのだろう、彼女は言葉をなお続ける。

「別に人生に不満があるわけじゃない、私はよくやっているほうだと思つ」

「そうかもね」

「それでも、こうして死ぬことについて考えてしまう私は異常なのかな？」

「どうだろう？」

ぼくは明確に答えなど出さない。ぼくの答えはぼくのもので、彼女の答えは彼女のものだ。

そこに他人の（例えばぼくの）考えや言葉などと言う不純物は一切、必要ない。もし、そこになにかが混じってしまえば、それは美しくないように思う。

「私は思うんだけど、常に人間は明日死ぬかもしれないわけでしょう？ 病気や事故、殺人やテロ。想像も予想もしてないだけで、ありえないわけじゃない」

「それはそのとおりだね」

「私達は知らないだけで、半年後には死ぬのかもしれない。運命なんて信じてないけど、そう決まっているって言う可能性はありえないことじゃない。なら、私とあの人達はなにが違うの？」

「……さて。……その、そう運命って奴を知っているか、どうかかな」

「私もそう思う、でも人の命の重さって言うのは予定が明確かどうかで決まるものなの？ その人の人生の重みってそんなものなの？」

「さあ」

「人は誰でも死ぬし、死ぬかもしれないだよ。そこには差はないでしょ。でも必死に生きてるかどうかは人によるでしょう。なら、みんなそこに注目するべきなんじゃないの？ そんな特定の人に目を向けて、可哀想だとか、頑張ってるだとか、感動したとか、生きる力を貰ったとかはその人がこれから死ぬんだから、って哀れんでるだけなんじゃないのかな、それってすごく……」

彼女はそこで言葉を止めた。が、言いたいことはわからなくもなかった。

「……ねえ、あなたはと思う？」

ぼくは答える。彼女の考えが決まったのなら、ぼくと言う不純物は入らないだろうから。

「例えば仮に明日、きみが死ぬとしたら。それできみの価値は変わらないと思うよ。もしも変わるものがあるのなら、それはきみじゃなくて、周囲の人間の価値観だよ」

「私は嫌だ、私は私だ。たとえ死ぬんだとしても、そうじゃなくても、ずっと必死に生きてるし頑張ってるんだよ？ それでまるで私の価値が上がったみたいに見て欲しくない」

「……そう」

でも、思う。もし、明日彼女が死ぬのならぼくの価値観は大きく変わるだろう、と。それこそ、この世界がひっくり返ってしまうくらいに。

きっと、彼女はそれを理解できないだろう。ぼくは未だにその理由を伝えられずにいる。

今日だれも k i e t a i (前書き)

今回はわりと反則です。
でも、ありかな、と。

今日だれも k i e t a I

今日、あいが家に帰ったら誰も居なかった。
母さんも、父さんも、兄ちゃんも。

だれひとり、いなかった。

たぶん、みんなで買い物に行ったんだろう。

そう思った。

すると、よるになっても誰も帰ってこなかった。

とりあえず、母さんのケータイに電話をかけた。

家のどこかから音がした。

家に忘れたいらしい。

……ケータイなのに、携帯しなかったらまったく意味がない。ま
ぬけな話だ。

だいぶ遅くなった。

もしかしたら、なにかあったのかもしれない。

でも、まだ決め付けるにも早い。

待ったほうがいいのか。

とは言つものの、あしたは予定がある。

あさから、あいはともだちと遊びに行くのだ。

しかたない、きょうは先に寝よう。きっと、あしたには帰ってい
るだろうし。

あさになっても帰ってこない。

困った、こういう時はどうすればいいんだろう。

とりあえず友達にえんらくして、きょうは行けないと伝えた。

だって、それどころじゃなさそうだ。

なにも、起きていなければいいけど。

かってに、あいをおいて親せきの家に遊びに行っても、べつ
にいい。

きょうなら、わらって許せるぐらい心配だ。
ふと、思いついた。

父さんと兄ちゃんのケータイにも、電話してみればいいんだ。
なぜ気付かなかったのか、不思議だ。

……おなじように、家のどこかから呼びだし音が聞こえる。
おかしい。

ぜんいんが家にケータイを忘れているなんて、へんだ。
どこからだろう。

あちこち探してみると、どうやら押入れのなかかららしかった。
そう、3にんとも、押入れのなかから聞こえた。

……ぜつたいに、へんだ。
押入れの手に手をかける。

がたがた、と立てつけのわるいとが開いていく。

……いた、3にんとも、なかにいた。あいを見てた。

くらい押入れのおくから見てた、ひざを抱えてすわりこんで見て
た、じつとこつちの方を見てた、こつちがなにを言っても見てた、
3にんともなにも言わずに見

今日だれも k i e t a i (後書き)

こついう不条理も好きです。

若干続きものになりますが、別に読まなくてもよし。
むしろ、読むのは時間が経ってからにしてほしく。

日記に同封された手紙（前書き）

たぶん、『今日誰も』を読んでくれた人だけが読むんだろうと判断して。

というか、読まないと不明な文章。正直、蛇足かな、と思ったり。

日記に同封された手紙

ぼくがこの家に入ったときに、発見した日記。日付は、この人物が友達と遊びに行くのと約束した日の前日、また当日のもの。その部分だけを抜き出したものだった。

この日以降、誰も本人とその家族を見た人は居ない。
これは夜逃げとして処理既にされてしまった出来事だ。

この人物が毎日日記を付けていたそれは間違いない。
古風にもパソコンなどでなく、わざわざノートを購入して、それに記録していた。

誤解のないように言うておくが、この人物はこんな奇妙の内容の日記を残すような人間ではないし、それどころか、この日付だけ他の日の字と字体が違い、文章も漢字の使い方も本人らしくない。

だが、本人の家族構成、また友人に電話を掛けたことは事実だ。
また、自分の居ない間に家族が親戚の家に遊びに行ったことを怒っていたことも、以前に実際何度かあったことだ。

しかし、それは本人とが書いた証明にはならないと、ぼくはそう思う。

それに、これを書いたのが本人だとしたら、なぜこんなところで書くのをやめる？

日記を書きながら行動していたとでも言うのか？
そんなことはありえない……はずだ。

この日記を警察に渡していない。それどころか、まだ他の誰にも見せていない。

ぼくは無断で他人様の家に入り、なにか手がかりはないかと探った。その際にこの日記を発見し、持ち去ったのである。その場所は奇しくも、この人物の両親が使っていた寝室。その押入れの前だっ

た。

この日記をどうしたらいいのか、ぼくは判断に困っている。

警察に言って、事件性はないものと判断されてしまうのでは駄目なのだ。ぼくはこの人物をなんとしても見つけ出したい。

一応、言っておくが最後に会ったと思われ、かつ最後に連絡をとったと思われる友人からはなんの情報もこれ以上は得られない。

なぜなら、その友人はぼくだからだ。

* 追記

携帯電話が4つ、押入れの中にあつた。

携帯を調べたところ、送信履歴にはぼくへの電話のほか、確かに父親、母親、兄に対するものがあった。

母親には前日に掛けた様子がある。

当日、母も含め3人には何度か掛けて確認した模様（全員分の場所の確認をした？）

一応、日記通り、である。

相手の携帯の着信履歴も確認（ただし、兄の分はロックがかかっていたため不明）

なお、押入れの中は空だった。

携帯のみがそこに残されていたのである。

……もちろん、ぼくの友人、逢^{あい}、本人の分も。

日記に同封された手紙（後書き）

こういう背景の物語だよ、って言う解釈もあり、かなって思い。
他の解釈や想像もぜんぜんあり。
これの続きを書くかは今は不明。

今だけ、冷たい素顔で（前書き）

死んでるって何ですかね？

脳死？ 心臓死？ そうじゃなかったら生きてるんですかね？

今だけ、冷たい素顔で

眠ったまま死ぬのは幸いだろうか。

僕は妹を、一枚のガラスを隔てて見下ろしながら……考える。

それとも、もう目覚めることがないのなら、その意識が戻ることはないのだとしたら、それは既に死んでいるのと同じなんだろうか。僕にはなにもできない。手を差し伸べることも出来ず、声を掛けても届かず、何も出来ないと言う無力さをかみ締める以外できることはない。ほかにはせいぜい、こんなくだらないことを考えることくらいだ。

自分の妹を材料にして、生きていることの大切さや、自由であることの尊さを知るかのような、そんな下種のするような真似を僕はしている。

(泣き叫び、悲しんで見せればいいって言うんだろうか)

妹はゆっくりと死んでいく。すこしづつ、変化のないように見えて彼女の脳は食いつぶされていくかのように、消化されていくかのように、さいごには死んでいく。

あと1年をかけて、ゆっくりと。

僕はその間、1年もの間、ずっと泣くことはない。

僕は冷たいのだろう。だけど、父や母を見てみると、そんなことは自分には許されないような気がしてならない。

僕は……僕だけは……何事もないように、当たり前前の日常を過ごすように生きていかなんといけなない。そんな気がしてならない。

(なんだって言うんだろうね、これは)

つらくない、はずはない。悲しくない、はずもない。

それでも、笑顔で生き生きと楽しそうにしようとする自分がある。明るく元気に過ごそうとする自分がある。

まるで自分が自分じゃない、そんな気分だ。人形にでもなって、誰かに操られているようなそんな気分だ。

もしも、自分の意思を感情を自分の思うままに表現できることが『生きていく』とするなら、僕も妹と同じように死んでいるのだろうか。

死んだまま眠っているのは幸いだろうか。
起きたまま死んでいるのは不幸だろうか。

僕はこれから、なにも未だ知らずにいる恋人に会うまでの僅かな時間に。

必死にその答えを探そうとしている。

僕は思う、たとえ妹がこのまま死んだとしても。

僕はきつと、それを誰にも気づかせずに生きていく。何事も起きていないかのように振る舞い、誰にもそれが偽りであることを気づかせることなく。

知っているはずの家族の前でさえ、ありもしない義務のためにそう続ける。

だから、もうすこしだけ。せめて妹と二人きりであるときくらいは。

僕は今、きつと能面のような表情をしているのだろう。

同じように死んでいるとしても、同じように人形のようにでも、眠っているかのように安らかな表情をしている妹とは違って。

僕は冷たい、表情をしているのだろう。

きつと僕は、この顔を誰にも見せることはない。

今だけ、冷たい素顔で（後書き）

悲しいことが起きて一番悲しいのは、明るく笑顔でいることなんじゃないのかな。

平気そうな顔をしていることなんじゃないのかな、なんて思います。でも、たぶん誰にも理解されないんだろうな。彼は。

それは私だけの歌（もの）（前書き）

幻聴とか幻視とか。幻覚ってなんで嫌なものがまず見えてしまうんだらう？

それは私だけの歌（もの）

歌声が聴こえる。

私はそれが初めて聴こえたとき、思わず足を止めた。周囲を見渡してもどこから聞こえているのか、わからない。

「どうかした？」

どうやら、私以外のだれにも聴こえていないらしかった。だれも気づいていない、けど、確かに聴こえる。

歌詞はなく、言葉として表現できない。旋律だけの歌。かなしくもあり、うれしくもあり、全ての感情と言う感情がためらめに入り混じったような混沌とした歌。

それは胸を刺す。昔どこかで知った、そんな痛みが胸を刺す。

どうしようもなく孤独なのに、一人じゃない。そんな力強さがある。

どこから聴こえているのか。だれが歌っているのか。なぜだれも気づかないのか。

いくつかの疑問を抱きながらも、いつしか私は、その歌声に自然と耳を澄ませ身を任せる。

ずっとその歌声を聴いているうちに、私はその歌を自然と口吟くちしやんむようになった。

私がそうすることで、私と言うフィルターを通して世界にようやく歌が届いた。

誰も知らない歌。たった一人が知っている歌。

でも、私の喉を伝って流れ出るその音は、その歌には程遠く、どこか濁っている。

外に歌を伝えきれない自分に怒りと、自分が感じているものを伝えきれない切なさが胸に溢れた。

どうしたら、そのままを伝えられるんだろう。

どうしたら、同じように感じてくれるんだろう。

なぜ 私にはそれができないんだろう。

……ずっと、そう思っていた。

でも、ある時聴こえてきた。それは聴きなれた、でも、まるで違うメロディ。

「……ん、なに？」

私の視線に気づき、友達は首を傾げてみせる。

「……あの、いまの」

「ああ、いつも誰かさんが歌ってるからさ。ついつい伝移^{うつ}っちゃったよ」

それは、よく聴けばあの歌とは似ても似つかないものだった。

技術とか、そんなものじゃなくて、上手いとか下手とかそんなどうでもいいことじゃなくて。

もっと根本的な定められている思いとか、感情とか、目に見えない成分が違うものだった。

でも、私は……それが綺麗だと思った。

それは私が歌いたかった歌じゃない。でも、友達の歌った歌は、その友達の持っているその人だけの思いや感情が込められたオリジナルの……とても魅力に溢れたものだった。

「え、なに！？ もしかして泣いてる！！」

なんか嬉しくて、悲しくて。それだけじゃなくて。

どうしようもないくらいに、負けたくない、とそう思った。

それは私だけの歌（もの）（後書き）

なんか複雑な話。いや、話は単純なんですけどね。
もうすこし、書きようあったかな？

えにつき

どうでもいい話を一つ。

俺は昔、友人の絵日記をのぞき見たことがある。

まあ、今考えればなぜ読んだのかわからない。そういうことは、礼儀より何よりやってはいけないことだ、とは子供の頃から思っていたから。

そもそもの始まりは、そう。俺が兄のCDを友人に貸したことから始まる。

それは当時はやっていたアイドルのCDで、俺はあまり興味はなかったものだから、その曲名すら怪しいところだが、たまたまにかの切っ掛けでファンだと言うことを知り、兄に内緒で貸したのだ。ただ、約束の期限が過ぎても返ってこなかったものだから、俺は兄にはれる前に彼の家へと向かわざるを得なかった。

行ってみれば、彼は留守、彼の母親によれば部活動合宿に行ったとのことらしい。随分、いい加減な話だろう？

差し障りのない程度に事情を話し、俺は彼の部屋に入れて貰った訳だ。

CDは幸いすぐに見つかったのだが、机に投げっぱなしにしてある日記を見て、ふと興味がそそられた。もしかしたら、その時は仕返しのつもりだったのかもしれない。

でも、俺は他人の日記なんかまじまじと読んで喜ぶ人間ではなかったたので、さっと流して読んでいったわけだ。で、なぜかあるのは、その当日の日付。

疑問に思った俺は、そのページだけをしっかりと読んだわけだ。日記には絵が描かれていて、それはどこか見覚えのある部屋の絵。それはそうだろう、その部屋はどう見ても彼の、つまり、今俺が今いるこの部屋なのだ。

さらに描かれているのは、部屋の片隅に小さな白い玉が落ちてい

て、その部屋の奥に誰かの背中がある。青い、ジャンバーを来ている誰か。
赤いなにかが滴るその白い玉を、俺は最初ピンポン球かなにかだと認識した。

それはどうでも良かった、そんなものよりも重要なモノがあった。そのページに書かれた一文、それが問題だった。

(今日、アイツが……)

(ぼくのこの日記を読んでいるのを、背後から見つめた)

俺はその一文を見て、ゾクツと全身が寒気に襲われた。

身動きが出来ない。そう、その日俺が着ていたのは、青いジャンバー。

それでも勇気を振り絞って、ゆっくりゆっくり……振り向いていくと。

誰も、いなかった。

俺はすぐに部屋から出て、ろくに挨拶もせぬまま彼の家を後にした。

それから彼と俺はなにもなかったかのように、それに触れることもせず、未だに友人でいる。後から思い返せば、あの時日記に描かれていた白い玉は……。

はて、もしかして目玉、だったのかな。

……まあ、そんな、もうどうでもいい話。

えにっき(後書き)

もしも、他のページもしっかりと読んでいたらどんな内容だったんでしょうね。

まあ、そんなことはどうでもいい話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2303o/>

一枚奇譚

2011年5月9日14時40分発行